

# 写実主義と自然主義

——ゴットヘルフの場合——

菅原政行

“Bauernspiegel” (一八三七) (農民の鏡) の開巻第一頁を  
ひもといてみよう。主人公イェレミアス・ゴットヘルフが  
その幼年時代を語りはじめる。

「私は年号が西暦でもって数えられない或る年、ある蒙昧な  
地方で生れた。父はかなり広い土地と四男三女をかかえた或  
る農夫の長男であつた。祖父と祖母は昔気質の実直な人で、  
二人とも朝から晩までまめに働いた。祖父は畑と家畜小屋の  
支配権をにぎっていた。彼は大変熱心に畑を耕したが、やり  
方は旧式で、種子に金をかけねばならぬ三坪の牧草よりも、  
種子に金のかからぬ一坪の野草を選んだ。家畜小屋から彼は  
借財の利息を捻出した。年ごとに彼は家畜を肥やした。しか  
しそのために、彼は先代より多くの馬鈴薯を栽培したとい  
うのではなく、むしろ穀倉の穀物を使ったのである。家の中は  
祖母がきりまわし、そこでは誰も祖母の前に頭があがらな  
かつた、祖父もである。煮炊きは一切彼女がひとりで行つた、  
人間の食事も豚の餌も。庭やあき地も出来るだけ自分ひとり

で片づけ、そのかたわら、ほとんど亡くなるまで麻屑を紡ぎ  
続けた。金は彼女が自分で箆筒の中にしまい、それについて  
の権利は祖父同様であつた。或る日祖父が上機嫌で市場から  
帰つて来た時、祖母は夜中に起きだして行つて、祖父の長靴  
下を調べて金を勘定しているのを私は見た、そして彼女がぶ  
つぶつぶやくのを聞いた。「また道楽をして来たんだね。  
大枚なお鳥目をあぶくにしてさ。明日は一つ油をしぼつてや  
るよ。」なるほど翌日彼等は一時間以上も奥の間にいた。ど  
んなやりとりがあつたかは誰も知らないが、その後祖父があ  
んな上機嫌で帰つてきたことは二度となかつた……」

ゴットヘルフの文章には、大ざつぱな言い方ではあるが、  
二つの要素が考えられる。即ち静的な要素と動的な要素であ  
る。“Leiden und Freuden eines Schulmeisters” (一八三八—  
三九) (或る教師の苦悩と喜び) のメーデーリーについての実に  
細かい身体的描写は第一の要素を代表するに充分である。う  
またゴットヘルフは運動に對する著しい感覚を持つてゐる。

物語られた事件に於ては、運動や身振りの描写は感覚的に非常に困難であるが、彼のそれらの描写は実に鮮かである。こうした二つの要素は必要に応じ、或は縦の線となり横の線となつて働き、これらは相結合して非常に暗示的な深い第三のディメンションを生みだしている。ケラーがゴットヘルフの略伝の中で「真のエーボス」の外的条件として「我々はすべての感覚的なもの、つまり目に見えるものや感じ得るものを、記録された描写や事件の間を押しまわされたり、引きまわされたりすることなく、完全に飽きたりた感じで共に楽しむ」という事、即ち現象や事件が渾然一体となつて現れることであると云っているのは、こうした要素の巧な組合せと配合を暗示しているのである。而してケラーはゴットヘルフにその好例を見出したのである。「彼は決してデウツセルドルフの人たちやアタルベルト・シュティフター流の画家的手法には耽溺しない。我々は誰でも多少の差こそあれこうした手法に一度はとりつかれ、遅かれ早かれそれを脱皮しなければならぬのであるが。しかも彼の場合、我々は到るところに緑あざやかな山腹の生々した陽光の中や美しい谷々の木蔭の中をさまよい、山岳のすさまじい雷雨の夜が明るい農地へ拡がって行く様をもまのあたりに見ることが出来るのである。」

冒頭に引用した「農民の鏡」第一頁、ここでは静的な要素が重きをなし、過去の回想である。ケラーがいわゆる「事件」の対照としていところの「描写」が正にその本質を示して

いる。絵画的なものは何一つ感じられない。そうかといってこれを彫塑として眺めることも無論出来ない。何故なら、その中には、その背後には無気味なほとどに生々したものが感じられるからだ。禍を予感させる何か差し迫つたものがすでに書き出しの文章にうかがわれ、来るべきものについて何度きつい陰影を感じつつ、我々は急速その「蒙昧」な地方に導いて行かれる。「蒙昧」——その語は無知と悪意と陰険に支配されるこの地方の人間の運命を力強い壁の一撃で約言しているし、生れた年が西暦で教えられないというのは、恐らく西暦の使用が禁じられたフランス革命の頃を指しているのであるが、ここではもつと広い余波的な速妄の象徴として用いられているのであろう。（註——フランス革命は一七八九年、ゴットヘルフの生年は一七九七年である。）ゴットヘルフにとつて、蒙昧と非基督教的とは勿論同義である。さて次に祖父と祖母が一言半句も動かし得ない適切な言葉で、頑固ではあるが現在にも思ひついているかのように生々と描き出されている。——*Grossvater und Grossmutter waren von altem Schrot und Korn, beide viereckicht und rüstig früh und spät.*（祖父と祖母は昔気質の人で、二人とも朝から晩までまめに働いた。）この文章はその力と簡潔さとの確さにおいて正に比肩すべきものがない。時の懐から現れ出るかのごとく彼等は粗削りの巨人像のように、のしのと歩み出て来る。*“rüstig früh und spät”*という句はこの彫像に生命と

働きを与え、堅い確乎とした面を保ちながら、過去を現在と結びつけているのである。次の文章では、力のバランスが暗示されている。祖父は畑と家畜小屋の支配権を握り、祖母は家の中を切りまわす。畑と家畜小屋、ちよつとした、しかも非常に適切に選ばれたこの二つの運筆は、祖父の時代離れのした農法を特徴づけるに充分であるし、祖母の権能と活動は明瞭な強いタツチで示されている。人間と豚のための煮炊き、庭や植木の手入れ、空いた時間の麻紡ぎ、しかも八人もの子供たち、これでは教育とか宗教とかのより高い精神面のための時間など残されようはずはない。金銭は祖母が自由に処理したというのも、こうした事情のもとでは別に怪しむに足りない。しかもこの点では、「祖父も祖母の前には頭があがらなかつた」と表現されている通り、祖母の方が優位を保っているが、この点についてはミーアスが自分の体験として語っている言葉は適切にこの間の事情を物語っているし、祖母の語るペルン訛りの „Da het afe ghudlet; es hatt es stifs Saali gah, was er versoffe het; dem will ig morn ds Karpitel lese.“ によつても明らかである。

ゴットヘルプについてこの頁だけしか読まなかつたとする、我々は彼を非常に優れた造形家と考えずにはいられないであろう。深く根をおろし、空間を削り出し、表面に現れない生命の底にまでひたりこんで、こうした個々の像を描き出して行く技巧は、とりもなおさず詩人の円熟の所産であるが、

これが彼の処女作であるにおいては、正に驚歎に値する。これらの語は、これらの文章はもはやドイツ語とペルン語のものではなく、それらは創造的精神のるつぽの中で新しい面目と新しい響きと新しい意義を勝ち得たのである。

次に „Geld und Geist“ (金銭と魂) の一節を引用するに當つて、はじめにちよつと付け加えておくが、 „Geld und Geist oder die Versöhnung“ (一八四三) の第一部は „Bild und Sagen aus der Schweiz“ の第二巻に、二部と三部は同じく第四巻と五巻に発表された。内容を要約すると——エメンタールの美しい農家屋敷リービヴィールには先祖代々高貴な実直さにあふれた敬虔な家風が支配していた。そこに居住するのは五人の家族、エンネリー、クリステン夫婦と三人の成長した子供たちである。正直ものだが退しい性格ではない長兄クリステリーは結婚もせず、恐らく将来は年老いたやっかい者としてこの屋敷にとどまる事になるであろう。屋敷は母と生写しであり寵児である、美しくて力強く、勤勉で才覚のある次兄レスリーが継ぐこととなる。長女アンネリージーは陽気な開放的な娘で、茶目で農業的な才能もあり、どちらかといえば父親の方に好意を寄せている。両親は性格的には異なっているが、その愛においては変りはなく、おたがいの足りぬところを補い合っている。クリステンはむしろ受動的な実直すぎるほどの温和な性質で、余り忙しい時には屋敷から脱け出したい方であるが、エンネリーは反対に手ばやい、能のあ

る、仕事にはむしる几帳面すぎる方の婦人で、貧しい人々を援け慰めている。万事きちんとした秩序の中に時は流れて行くが、クリステンがまずい保証をしたばかりに、計らざるも蒙った五千ポンドの損害は、如何なる驚きにもびくともしなかつた夫婦を不和に陥れ、美しい家の平和をまる三年間も葬り去つてしまふ。暗い家の勞悶氣に両親も子供たちもみな惱みぬく。——罪の多くを自分に帰したエンネリーは牧師の説教に力づけられて自省の勇氣を見出し、再び共にする夜の祈りは彼等を和解へと導く。聖靈降臨祭の日曜日、一同は再び帰つて来た和合のしるしに、うち揃つて晚餐を樂しむ。果樹園でのなごやかな団欒の席からレスリーは半鐘の音に駆け出して行かなければならない。火事場で彼はかつて踊りて自分の注意をひいたことのある娘に再会する。帰途ちよつとした殴り合ひで怪我をした彼は氣を失つて林の中に倒れている。アンネ・マレイリー——娘の名はこういっただのであるが——は偶然にこれを見つけて、男を自分の家へと運ばせる。レスリーは娘の家で氣を取りもどす。両親は息子を家に連れ帰る。或る温泉場でレスリーは再びアンネ・マレイリーとめぐりあい、二人はここで愛の言葉を交す。アンネの父親は如才のない男ではあるが、しんからの守銭奴、家庭ではなかなかの暴君で、娘を眼のくぼんだ金持の老人グリッティーにめあわせようとしていたのであつたが、二人の間を知り、急にレスリーは勿論、リービヴィールの人々が誰一人受入れること

の出来ない婚姻契約を要求する。再び「金銭」と「魂」の葛藤がこの幸福を破壊し去るかのようであつた。あわやアンネ・マレイリーはレスリーの愛を疑い、レスリーとて両親や兄弟姉妹の利益を無視するわけには行かない。この時エンネリーは再び金銭を克服する。彼女は自分の死を予感し、疾くにかの平和のために身を投げ出していたのである。痼病にかかつた貧しい人々を看護し、自らも遂に死病に感染する。死に顔しながら、彼女はレスリーにアンネ・マレイリーを見捨てないよう説得する。この時天の回答でもあるかのように、嫌な結婚をのがれて、突然アンネ・マレイリーがエンネリーの死の枕辺に駆けこんで来る。エンネリーは二人の愛の契りを祝福する——

以上が *„Geld und Geist“* の梗概であるが、次にその一節を引用して、ゴットヘルフの文章について考えてみよう。

「エンネリーはとうとう家の中にはいつた。それからドアを閉め、火の氣はないか、また何もかも正常の場所に置かれているかどうかを、いつものように確かめてみた。また胸がどきどきしはじめたからだ。それから彼女は新參の信徒が教会堂のいつもは聖職者だけが足をふみ入れる祭壇にでも近よるかのようになり、自分の部屋に近づいて行つた。無言で彼女は寝仕度をし、無言で彼女は腰をおろす場所を求めた。それからしばらく彼女はそこに腰をおろしていたが、やがて再びいつものようにお祈りをはじめようと思つた。しかし胸はますます

すつまつて来るばかりで、言葉はどうしても出て来ない。唇が動いても声が出て来ないのである。それはあたかも何か目に見えない力が彼女の前に立ちふさがり、もとの習慣の軌道に彼女を押しやるうとでもするかのようであつた。彼女は褥に身を投げたい思ひだつた。彼女の魂は彼女に呼びかけた。

「今日はだめ、気を落ちつけ、心を丈夫に持つて明日まで待つのだ。明日はきつとうまく行くだろう。明日はきつ」とよい日になる——しかし一方また、彼女には牧師の言葉も聞えて来るのだつた、火にかけた食物がまだ煮えぬ間に、その家の主婦は死ぬるかも知れない、永遠の安らぎは天国にある、天国に席を見出そうとする者は地上にいきかきを遺してはならない、心にいきかきを懐いてはならない。彼女は再び声を出そうともがいたが、出て来るものは額に玉をなす汁ばかりであつた。その時彼女の魂は名状しがたい歎息とともに、高く神に向けられた。「神よ何故に我れを見捨て給う！」すると今まで威嚇するように彼女の前に立ちふさがつていた暗い影は消え去り、胸をしめつけていた鎖がブツリと音をたてて断ち切れたかのように思われ、言葉は自由に出せるようになった。彼女はおもむろにそして身を震わせながら、しかし烈しい調子ではつきりと主の祈りを唱えはじめた。

エンネリーの口からもれた最初の声に、クリステンは半鐘の音に耳でも打たれたかのようにハツとした。それから彼は居ずまいを直したが、やがて彼の胸からも声がもれた。彼は

彼女と共に祈つた。そしてエンネリーが「我れが我が罪人を許すが如く、神よ我が罪を許し給え」と祈願を唱え、今やむせび泣きながらいやが上にも体を震わせ、やがてその声ですり泣きに変つた時、彼も彼女と共に泣いた。そして泣きながらその祈りを最後まで唱え終えた。彼等にとつて、その祈りはあたかも太陽のようであつた。やがて黒い霧がその太陽をとり巻き、たがいに相手の顔を見分けることも出来なかつた。しかしやがて太陽は霧の上に出、光はもれて霧を破り、霧はちぎれて、神自らの御手が天からさしのべられたかのように、霧は高く高く昇り、ますます淡い小雲となつて舞いあがり、高空に跡もなく消えていつた。彼等の周囲は明るく澄み、暗い影はもはや無く、たがいの心には隔てはなかつた。胸のわだかまりも解け、エンネリーは晴々した氣持で、神聖な沈黙を破つて許しを請うたが、クリステンはただ答えるのだった。

「何もあやまることはない。みんな俺が悪いのだ。俺がお前のいうことを聞いていたら、何もこんなことにはならなかつたのだ……」

我々がここで小説「金銀と魂」の最も崇高な場所に立つてゐるのみではなく、人生全般の最も崇高な場所に立つてゐることは、作品の梗概からも、また引用の部分の冒頭にある「教会堂の神聖」という言葉や、同じく末尾の「神聖な沈黙」という作者自身の言葉からもうかがい知ることが出来る。リー

ビヴィールの農婦エンネリーは夫婦の和合や家庭の平和を破壊する悲惨な軋轢の中に、死の予感におそわれ、はじめて自省し、謙虚な気持で山上で苦闘したあげく、ついに自分を克服し、和解という「神聖な仕事」のために堅い決心で家に帰る。夕食の席でも気分を新たにし、それから台所の戸口でも彼女は家族たちと親しく言葉を交す。さて一人一人静かな部屋に帰って行く時、来るべき情景を告げ知らせるかのよう、空には彼女の心中を象徴して、月が空高く昇っている。ところが最後の最も大事な一歩がまだ残されている。良人と寝所におもむき、かつてのよう「我等が父」を声高に祈ることである。かつてこの祈りを行わず、エンネリーは不和のゆゆしき第一歩をふみ出したのであった。ゴットヘルフがこの「和解」の最奥の核心を小説的に如何に解決しているか、これはかつて書かれたものの中で最も崇高な頁の一枚である。

ここでははじめの一語から最後の一語まで、すべては真実と深さと直接性に充ち満ちている。話は農家の人々の話であるが、詩人はエンネリーの口に、十字架上のキリストの言葉 *“Vater, hast du mich verlassen!”* を語らせるにやぶさかではない。それほどに彼はこの内面的出来事を重視しているのである。真実を決定するものは先ず第一にその内面である。心に生ずるものは先ず第一に彼の興味をひく。重大な契機における魂の動きに対する詩人の感覚は実に鋭く微妙である。心の動きはその小波をきわめて自然に汀に打ち寄せはする

が、それは非常に特徴的なごく微細な点にすぎない。

エンネリーの身振りや表情は大して常とは変らない。しかしそれらが如何に透明に見透され、如何に生々と生命づけられ、その簡潔な表現から、如何に多くの関連が生じて来ることか。舞台は感覚を超えた空間へ、人間の弱さと克己意欲が互いに闘い合う超感覚の空間へと拡がって行く。屋敷の裏山でエンネリーは自身の勝利を得た。今やそれを行動に移さなければならぬ。或る日の午後天と地が一つに成るように思われたが、今や彼女は二つの世界が相触れ合うのを知る。鎖はブツリと断ち切れ、絶望の叫びは解放の欲びに変わり、彼女の唇からは新生の祈りがもれる。詩人はこれを四個の副詞 *“langsam und bebend, aber inbrünstig und deutlich”* (おもむろにそして身を震わせながら、しかし烈しい調子では。きりと) で表現している。一見対立した世界の不思議な調和はさらに拡がって行く。クリステンにも和解を望む心がめざめて行く。しかし彼の場合もやはり硬化した最後の殻が破り去られなければならない。彼の胸から「声もれ」、彼は一緒に祈る。さて贖罪の祈りの中に、二人の心の中にはかつての独善の殿堂は倒壊し、二人をその下に埋めつくしてしまうが、やがてそれは新しい土壌の開発となり、その新しい土壌の中に彼等は感動に打震えながら再び顔を見合せる。限りなき恭順と悟りの上に祈りの太陽が輝き、もはやこれを覆う霧はなく、心のわだかまりは解け、より高き世界は豁然

と開かれるのである。

次に「Wie Uli der Knecht glücklich wird」(農奴ウーリー) (一八四一)の第一章の一部を引用しなければならぬが、これは文字通り冒頭の部分であるため、その梗概を述べることが省略することにし、そのスペースを本文の引用に譲ることとする。

「地上には暗い夜が横たわっていたが、「ヨハネス！ ヨハネス！」と繰返し繰返し叫ばれたのは、あたりの夜よりもさらに暗い場所であった。そこは大きな農家の小さな部屋で、背景をほとんど埋めつくすほどの大きなベッドには農家の主婦が一人、夫と一緒にふせっていて、妻は夫に、「ヨハネス！」と叫びつづけていたが、やっと夫は口をもぐもぐしはじめ、とうとう彼は尋ねはじめた、「何だ、どうしたというんだ」「起きて飼葉をくれておくれ。もう四時を打ったよ。ウーリーは二時をまわってやっとなつて来て、おまけに寝部屋に昇りがけに、梯子段をふみはずしてさ。私はあんたが目をさましはせぬかとはらはらしたよ。騒ぎがあんまりえらくてさ。だいぶん酩酊していたようだし、今時分とても起きては来やしないよ。もっとも、あかりを持って家畜小屋にあれば込んでくれるよりは、まだとは思うけどね」「いまだきの奉公人には困ったものだ」、あかりをともして服を着ながら農夫はいった、「手に入れるのはなかなか容易じゃないし、給金は幾らくれてもきりはねえ、とどのつまりは何から何ま

で自分でやらねばならず、何をされても文句ひとつ言えやしねえ。主人風はおろか、いさかきを起さず、陰口をいわれまいとするには、それこそ足一つふむにも加減があるというもんだ」「だからといって放っておくわけにもいかねえ」、と妻は言った、「しよつちゅうなんだからね。つい先週も二度も仕事をほったらかし、そればかりか謝肉祭にならぬうちからお給金の催促さ。なにもあんたのためばかりじゃない、ウーリーのためだよ。何も言わなきゃ、いい気になつて自堕落のしほうだいだよ。その上わしらはとくと考えなきゃならない、やっぱり主人は主人だよ、人は言いたいことを何でも当世流にいうがいいさ、奉公人が仕事のかたわら何をやるかと誰の知ったことでもない、などとね。ところがそうは行かない、主人はやっぱり家のあるじさ、主人が自分の家の中で大目にみたこと、奉公人たちに許してやったこと、そのことについては主人は神と人間に対して責任を持たなきゃならない。それがまた子供たちのためにもなるんだよ。みんなの朝食が済んだら、あんたはあの子を部屋によんで、よく教えてやらなきゃならない」

多くの農家ではこんな風である。土地が先祖代々うけつがれて来て、その結果家風が定まり、家の信用が立派な慣習をつくりあげ、近所の注意をひくような争いごとや激しいいさかきも起さない、つまり昔からのいなか貴族に属する農家では殊にそうである。家は気品の高い静けさをたたえて緑の木

立の中に立ち、家の中や周囲には居住者たちが静かな落ちついた物腰でたち働き、木立ごしに聞えてくるのは馬のいななきぐらいで、人の声は聞えて来ない。口やかましい小言の声などもめつたに聞えて来ない。夫婦が他人の耳にはいるほどたがいに争い合ったりすることは決してないし、奉公人たちの失策も見えてぬふりですごすか、何かのついでにちよつと注意をあたえるだけで、それも他の人たちがほとんど気がつかぬぐらいに、ちよつと一言ほめかすだけである。何か特別のことが起つたり、或は腹にすえかねた時には、彼等はその無法者を出来るだけ人目につかぬように部屋によぶか、一人で仕事をしているところを見つけて、世間でよくいうように、さし向いで訓戒するのだが、主人はそのためには文字通りの準備をしてかかるのが常であつた。彼はこの訓戒をそれこそ父親のようにごく穏かに行い、無法者に何もかも腹藏なく話し、最も言にくいことも隠しだてせず、扱いは公平で、その行為の結果を将来の運命に関係づけて言いきかせるのである。それが済むと主人ははればれとした様子で、叱責された者も他の人たちも主人の振舞の中に苦々しさや腹だたしさといったようなものをまったく感じとることが出来ないほどに、問題は円満に処理されるのである。こうした訓戒はその中に優位を占める父親らしさのため、それが行われる物腰の程かさのため、それにも増してその寛大さのため、大ていは立派な効果をおさめる。こうした農家の我慢づよさと落着き

のある厳格さは、ほとんど人々の想像もおよばぬところである。

主人が家番小屋で仕事をあらまし終りかけた時、ウーリーも遅ればせにやって来たが、口は堅く結んだままで、彼等はたがいにひとことも口を開かなかつた。台所口から食事を知らせる声聞きこえて来た時、主人はさっそく井戸端の水槽のところに行つて手を洗つたが、ウーリーは何時までぐずぐずしていて、一こうに行こうとはしない。主婦が自分の口でもう一度彼を呼ばなかつたら、彼はおそらく全然来なかつたであろう。前もつて恥じるのは、あとから恥をかくよりはましだということを、彼は知らなかつた。しかし彼はそれを経験することとなつた。

食卓では彼に関係したことは何も言われせず、たずねられもしなかつた。二人の女中も顔をしがめてみせるわけには行かなかつた。主人と主婦が謹厳そのものの顔付だつたからである。さて食事が終り、女中たちが皿をさげ、最後に食べ終わったウーリーが肘を食卓からあげ、縁なし帽を再び頭へのせた時、つまり祈りを終えて出て行こうとした時、主人は「おいで、話がある」といって、先にたつて小部屋にはいり、二人が入り終ると、部屋のドアをしめた。主人は上席の小机のそばに腰をおろし、ウーリーは戸口のところでかしまつた顔付で立っていたが、その顔はやがて反抗的な顔に變つていった。或は悔恨的な顔というのかも知れない。



ウーリーはまだ二十歳まえの見るからにたくましい長身の美しい若者だったが、その顔にはなぜか貞潔と節制を思わせるものがなく、それが見る人に来年には三十歳にもなりかねない印象をあたえていた。

「ねえ、ウーリー」と主人ははじめた、「これ以上だまっ  
て済ますわけにはいかん、あまりだらしがなき過ぎる、自墮  
落が過ぎるといふものだ。わしは自分の牛や馬を、ブランド  
ーやぶどう酒のことで頭が一ぱいの男に任せておきたくはない。  
そんな男にあかりを持って家畜小屋に行つてもらうのは  
どうかと思うし、そのうえお前のように煙草をすう者には尚  
更のことだ。たくさんの家がそういつた粗相で灰になつてい  
るんだからな。お前は自分ではどんな気であるのか、何を考  
えているのか知らないが、この先どうなることか、わしには  
かにもく見当がつかない」自分は何も粗相をしたおぼえはな  
い、とウーリーは答えた。仕事はいつもちゃんとやつたし、  
他人に自分の仕事をしてもらった覚えもない。呑んだ金も自  
分で払う。どんなに浪費しようとする人の知つたことではない、  
自分の金を自分で使うだけだ、と。「しかし」と主人が答え  
た、「金を浪費するのは別人ではない、わしの用人なのだ。  
お前がむちやをやれば、それはわしに降りかかつて来る。世  
間の人はいふのだ、あれは地主の用人だと、世間はお前の  
気持などは一向に知らずに、地主がお前をしたいほうだいに  
させておく、あんな用人でも置いておきたいのだ、などと

ね。なるほどお前はまだ一度も家を焼いたおぼえはない。し  
かしよつく考えてみるがいい、ウーリー、そんなことは一度  
あればもう取返しはつかないことではないか。かりにお前が  
わしの家を焼いて、わしや子供たちがまだその中に残つてい  
ると考えてみるがいい。お前は平気でいられるだろうか。お  
前の仕事がなんだ。一日中寝てもらった方が、わしには  
有難いぐらいだ。乳をしほればしほつたで、乳牛にまじつて  
いねむりをする。見るといふわけでもなし、聞くといふわけ  
でもなし、味うといふわけでもない、まるで気がぬけたよう  
に家のまわりをぶらついている。はたの見る目もみじめなほ  
どだ。借金で行きそびれている放蕩仲間のことより他には頭  
の中には何一つないような顔付をして、お前はそこらにつ  
立つているのだ」別に仲間のところに行きそびれた覚えはな  
い、とウーリーは言つた、そんなものは自分には用はない。  
働きが足りないというのなら、何時でも暇をもらおう。近ご  
ろの主人たちと来ては、いくら働いてもこれでよいという際  
限がない。どれもこれもひどい主人ばかりだ。出来るだけ多  
く働かせて、手間は出来るだけ少く払おうとの算段で、食  
物は悪くなつて行く一方、身になるものをとつたり、菜、葉  
のほかにちよつと脂気あぶらけでもほしかつたら、けつきよくは葉虫  
でも黄金虫でもばつたでも、手当り次第に拾つて来るよりほ  
かに道はない。「ねえ、ウーリー」と主人は言つた、「話  
し合ひはこの辺でやめよう、お前はまだ興奮している、お前

にはまだ何も言うべきではなかったのだ。それはそうと、わしはお前を気の毒に思う。他の点では立派な若者だし、仕事だってやれば出来るんだからなあ。一時わしはお前はひとかどの者になれそうだとよるこんでいた。ところが仕事を怠けだし夜遊びをはじめてから、お前は人柄ががらりと変ってしまった。心の中はまるでからっぽ、いつもボカンとしていて、人が何気なく話しかけたりしても、お前は悪態を返すか、さもなければ一週間も口をきかずに黙ったきり。それどころかお前は放蕩者たちと交際し、もっぱらそいつらを頼りにしている。そんなことではお前は不幸になるばかりだ。お前がグネッゲレルの家のアンノ・リージーのところに通っていること、あれとすっかりでき合っていること、そんなことをわしが知らぬと、まさかお前も思うまい。あれはなかなかのしたたか者だ。あんな女をくどくのは鳩小屋で女をくどくのと同じぐらい容易だ。あいつはどんなならず者とも関係しているんだからな。名を詐るのに、お前はあいつにとつては正に跳え向きというもの、いざとなればお前は他人の代りに子供かたの洗礼に立会わなければならぬ。お前と同じことをして今ではすっかり落ちぶれてはて、食う物も食わずにいる数多くの男たちと同じように、門の前の格子のように、お前は一生涯ひもじい思いで暮らさなければならぬ。何の能もない人間、持つものも持たず物乞いをしたり借金をしたり食べる物も食わずにいなければならぬ人間には、他のことがどんな

にうまく行こうと、来る年も来る年も未来永劫に饑饉年が続くというものだ。さあ行ってよく考えてごらん。それでもどうしても量見が変えられないというのなら、それはもう致し方のないことだ、行ってしまっておくれ、わしはこれ以上お前にいてほしいとは思わない。一週間の中に出て行っておくれ」

頗る長い引用になってしまったが、バルテルスやムーレル (Gabriel Muret) やフンチカー (Rudolf Hünziker) 等のゴットヘルフを以て「自然主義」の嚆矢となす思想の依つて来る所以をうかがうのに正に好個の例と思われたからである。こうしたゴットヘルフ論は勿論今日の我々を満足させるものではないが、「農奴ウーリー」の引用にも見られるように、一見単純な日常生活を扱い、これに依存しているところ、これらの説も必ずしも不当とはいえないかも知れない。しかしバルザックが基礎づけ、ゾラが隆盛にもたらした「自然主義」はその理論と実行に於て実験的記録をそのよりどころとしている。即ち継承された運命や現代のいわゆる「科学的」に忠実な描写をよりどころとしている。人間は自然主義者たちにとって、植物が空気と土の産物であると同様に、遺伝と環境とによって決定される自然の一片に過ぎない。かくの如き見解に対しては、ましてかくの如き芸術運動にたとえ遠くからにしても道を拓いたという主張に対しては、ゴットヘルフは胸に十字を切つて抗議したことであろう。彼の人柄全

体からしても、彼はそのような思想とは正反対の極に位置していたからである。

外觀上単純な日常生活に依存する点があるとはいへ、それだけで「写実主義」か「自然主義」かを論ずるのは意味がない。とにかく余り大きな意義はないであろう。どの作品を見ても、ゴットヘルプの描く人物はあくまでそれぞれの日常生活の圏内にとどまっただけであるが、その日常生活は高い人間性を示唆する体験の波に洗われている。

引用の文に於ても充分感じさせられるのであるが、このような作品に直面すると、いわゆるつきなみの意味に理解された「写実主義」とか「自然主義」とかいう語が、しかもそのままの理解で、このような作品をも云々しなければならぬとすると、我々はこれらのイズムスの概念が如何に貧弱であるかを痛感せずにはいられない。芸術的な深い理解にとって、外面的な複写的忠実性、対象物が描かれる外面的複写的忠実度など、大した問題ではないのである。所詮、「写実主義」「自然主義」は芸術上の問題であるよりは、むしろ社会的、倫理学的問題なのである。彼の最も優れた仕事は農民の中に永遠の人間性を見出してこれを提示し、永遠の人間性を農民の中に認識してこれを言葉で表現し、しかも読者にありありと印象づけたことである。こうした直観的忠実性は彼にとつては眞の芸術の根本的前提であり、新奇を意図した芸術的手段では決してない。農民階級と結びついた彼の文学の「写実

感」が多少新奇なものであったことを、彼自身も次第に意識するようになった。後にはしばしば意識的にこれらの写実的描写を試み、時には多少粗野に、必要以上に農民階級の日常生活に指を染めたことはいなめない。しかしこれとて「自然主義」と何等相関するものではない。――

(一九五九年十月、未完)